

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

# 文化高知

2015年1月 NO.183



[もくじ]

- 2～3 わたしと路面電車のある街で…田中基希
- 4～5 これからの「文化」の話をしよう…筒井裕志
- 6～7 高知出版学術賞その後⑥「肩の力を抜いて」…武藤整司
- 8～9 Japan, be proud of your music education…Naomi Charatan
- 10～11 言葉の現場から49 褒姒の笑いのなぞ④…広井護
  - 12 あらしの後…清里達也
  - 13 高知市文化振興事業団11月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「初日の出」 桑江 弘将

公益財団法人高知市文化振興事業団

# わたしと路面電車のある街で

田中 基希

音の一番古い記憶は何であったか。おそらく、母の子守唄だったように思う。どこの誰の歌かも知らぬし、調べようとも思わない。いや、調べないほうがよいのだ。こういうものは知らないほうがよい。知らぬまま、このまま大事にしまっておきたいとても美しい記憶。または、生まれた家の窓の外に広がっていた海から聞こえてくる、寄せては返す波の音だ。遠く水平線に沈む夕日を眺めた穏やかな夕方、時化で荒れる海が窓を叩く夜、さまざまな音がそこにはあった。

わたしは、祭りが好き。祭りが好きで酒好きというこの連鎖がこの街を形成しているのだ。皆で楽しく騒ぐことが大好きな人々は、酒を煽り盛り上がりは懐を寂しくする。この土地ではこの構図に当てはまる人が多くいらっしやるだろう。無論、わたしも例に漏れずそういう類の人間である。

が、音色は好きなのだが弾こうとは思わない。その理由は、サイズが大きすぎるという点。手元で弾いていても遠くで音が鳴っている気がしてどうもしっくりこない。その点、ギターはいい。腕の中に抱え込んで弾くから、自分の腕の中から音が生まれていくという感覚がしつかり得られるところがたまらなくいい。そんなわたしはギター好きが高じて、ギターと珈琲の店を始めてしまったのだから因果なものである。

演奏させてもらったときの話だが、現地の友人にライブ中こういう紹介をされた。「日本のブラジルからきた男」と。なるほどと思った。以前より、わたしも同じようなことを感じていたからだ。わたしの店に遊びに来る県外の友人にも同じようなことを自分も言っていたし、高知を体験した人は皆納得して帰るのである。

がここにはあるのだ。まったくすごい土地である。

そして、祭り好き。祭りが好きで酒好きというこの連鎖がこの街を形成しているのだ。皆で楽しく騒ぐことが大好きな人々は、酒を煽り盛り上がりは懐を寂しくする。この土地ではこの構図に当てはまる人が多くいらっしやるだろう。無論、わたしも例に漏れずそういう類の人間である。

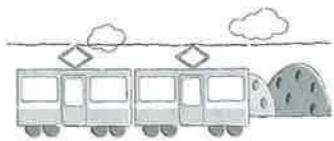
では、そういう構図が駄目なのかといえばそういうわけではない。むしろ、これであるからこの土地



に惹かれるのだろうか。地理的条件、気候も相まって独特の文化を形成しているように思う。この条件こそが高知を外国のように感じさせる要因だ。陸の孤島だとよく言われるが、それがむしろよかつたのではないか。夏の暑さは関東や関西のそれとは違う、焦げつきそうな日差し。春、秋は短く、冬は南国という名前から程遠く芯から冷える。森林の占有面積も日本一で、これも意外に思われがちだが、住んで納得の山ばかりである。もちろん、海はあるが、山と海ばかりで平野は猫の額ほどしかない。

話を逸れてしまったが、要はアクセスが悪く不便な土地であるという条件が、固有の文化を形成し、それが様々な可能性を秘めているように思えてならない。サンバやマンボやレゲエなんかが高知で流行って、よさこいとラテン音楽の街にならないかとひそかに期待しているのだがどうだろう。

姿を見せなかったときには困ったものだったが。これまで参加させてもらったどのバンドよりシンプルなバンド。彼らといることで自分の中にある音楽がようやく純粋に鳴らせ始めたような気がする。以前、わたしは理想とするミュージシャン像を追い求め、そのものいかにして近づけていくかということばかりを考えていた。それも大事な作業であるが、同時にわたしは自分の中で鳴っている音を見て見ぬふりをしてきた。なぜなら、そんな音は流行ってないし、誰も喜ばないだろうと自己否定をして、人の目ばかりを気にしていた。そんなことを考えているうちにだいたい遠回りしてしまった。わたしはわたし以外のなものにもなれない。今まで経験してきたものの、今の生活がわたしの音になっている。当たり前のことだが、それに気がついてからは凄く楽になったものだ。作る音はより単純に、より原始的に。ひよんなことから組んだバンドだが、なかなか気に入っている。



たなか もとき

一九八四年 高知生まれ高知在住  
シンガーソングライターとして  
県内外で活動。ギターと珈琲の  
店 slowhand/mojo 店主。

# これからの「文化」の話をしよう

筒井 裕志

どこかで見たようなタイトルですが、特に深い意味はありません。某教授の著書へのオマージュという事です。

ぼくは今(二〇一四年十一月二十五日)、いの町にある一軒の古民家で、留守番をしながらこの原稿を書いています。

「イノビ・オーダー2.7 IMOB ORDER (二〇一四年十一月二十二日〜三十日)」は、いの町のまちなかで開催されるアートイベントで、今回は四回目。ちなみに、第一回が二〇〇八年。二〇一二年の二回目が2.0、二〇一三年の三回目が2.5、そして今回がちょっと進んで2.7。この慎ましいバージョン表記に好感が持てます(あと、「IMOB」も誤植ではありません)。イノビ・オーダーは、いの町の

も前人未到のビッグイベントで、あの小さな集合住宅に三日間で二千人を超える来場者が県内外から詰めかけたもんだから、会場は大混雑するわ、主催者代表の岡本さんは最終日前夜の講演会後に寝込んでしまいわ、はじまりから終わりまで何ともドラマチックな、まさに怒涛の三日間でありました。蛇足ですが、奈良美智さんは世界的にも評価されているアーティストで、今、日本を代表する現代美術家のひとりと言われています。一方、沢田マンシオンは、ある著名なまちづくりプロデューサーをして「日本のガウディ」と言わしめた素人夫婦が、セルフビルドで建てた鉄筋コンクリート造の集合住宅。アーティスト、建築家、デザイナーをはじめ、そうした方面に感度の高い若年層などに根強いファンを持ち、都会人も「高知は知らないが沢田マンシオンは知っている」という、ある意味現代高知を代表する(?)建築物のひとつです。

中心市街地にある空き家や店舗、倉庫などを会場に、県内外の若手アーティストを中心とした作品の展示やワークショップ、ライブなどを行うイベントで、今回は十二カ所の会場に、三十人のアーティストが参加。これだけの作家が一度に集まるアートイベントも、高知では珍しいのではないのでしょうか。その会場のひとつ、G会場、なぜ、ぼくは留守番をしているのか。ぼくは、地方公務員として高知県文化生活部文化推進課で働いています。いまの職場に配属され、芸術文化担当になって四年目になります。そこで担当している仕事のひとつに高知県芸術祭という事業があり、その中の取組のひとつ

として、色んな意味で長く思い出に残るものになったと思うし、ほくも仕事でほんの少しそのお手伝いができたことをとても嬉しく思います。そして何より、こんなおもしろい出来事が高知でも起こっているんだ!と、高知で生まれた育った特に若い人たちに、声を大にして伝えたいのです。ただ、沢田マンシオンは魅力的な高知の文化資源であり、観光資源には違いありませんが、多くの来場者が押し寄せた奈良美智さんの展覧会会期中、近隣の商業施設などに無断で車を停める人が後を絶ちませんでした。また、どんなに沢田マンシオンの評判が良くても、市民の安心・安全で快適な住環境を守っている市の建築指導課にとつては、建築基準法に違反する建築物に変わりはなく、指導の対象なのです。一方で、それによって迷惑を被っている人たちがいることも付け加えておきたいと思えます。

(ややこしい...)として、平成二十六年年度から Kochi Art Projects (以下、KAP) という助成プログラムをはじめました。KAPは、「地域×アート」をテーマに、高知県内の特色ある芸術文化活動を支援しようという取組で、具体的には、資金面や広報面で支援を行っています。今年度は、公募・選考の結果、六つの事業を採択させていただきました。そのひとつがイノビ・オーダー2.7でした。そんな経緯から今日ここで留守番をしているわけですが、ぼく自身、イノビ・オーダーは二度目。初めて来たのは一昨年の2.0でした。二〇一二年にイノビ・オーダー2.0を観に来たとき、コンパクトで趣のあるいの町の街並みや、古い日本家屋の中に溶け込んだ作品の

と、その土地で受け継がれてきた文化、そしてそこに暮らす人々を指しますが、その中にアート、あるいはアーティストという異物を加えることで、その地域にもう一度注意を向けさせる。地元の方でさえ、日々、見ているようで見えていなかったものに、あらためて気づかせてくれる。それは「地域×アート」がもたらす効果のひとつであり、だからこそ、過疎・高齢化でどんどん弱ってきている「地方」において、今、そうした事例が増えているんだと思います。文化は、続いてこそ文化です。一度っきりのコトを、文化とは呼びません。また、文化が続く、受け継がれていくという事は、変わらないうという事ではありません。むしろ、変わらなかつた文化はいつしか途絶え、変わることで残ってきたものが今ある文化と言えるでしょう。

文化には、変化が必要なのです。何を残して、何を捨て、何を棄てるのか。それを考えて、行動することは、いま生きているほくたちにしかできません。間違えない

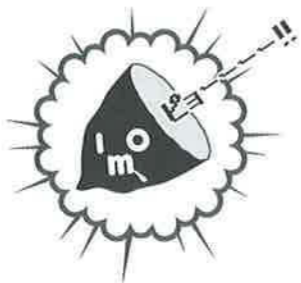
数々を観ながら、「ああ、もったいない。もつと色んな人が観に来てくれるといいのに」と、そんなことを思いながら町を歩いていました(その日は雨で、その影響もあってか来場者は少なそうでした)。

ぼくは、二〇〇八年、イノビ・オーダーが初めて開催された年に高知へUターンし、二〇一〇年には第一回瀬戸内国際芸術祭にも足を運んでいました。イノビと瀬戸芸。規模はぜんぜん違うけれど、根っこの部分はかなり近いように感じましたし、何よりも、地元高知にもそんな取組をしている若い人たちがいることが嬉しくて、しばらく続くといいなと、無責任な期待を抱きながら会場を後にしたことです。

同じく、KAPの今年度採択事業の一つに、「三日間の奈良美智・ドロイイングショウ(二〇一四年十一月七日〜九日)」があります。あの、奈良美智さんが、あの、沢田マンシオンで、三日間だけの展覧会+講演会を、なんと無償でやってくださるという、わかる人にとつては前代未聞、沢マン史上

ようにしたいものです。大事なものを、失くしてしまうかもしれませんが、

…いや、そんな重そうな話じゃなくて、「高知の文化はおもしろいよね〜」って、そんな話をしたかったんです...



つつい ひろし

一九七六年 高知県土佐郡土佐町生まれ

高知県文化生活部文化推進課主任(芸術文化担当)。大学卒業後、東京都内の広告制作会社に勤務。二〇〇八年に土佐町へUターンし、二〇一一年に高知県庁入庁。

## 「肩の力を抜いて」

武藤 整司

わたしの学問上の専攻は「西洋近世哲学史」だった。過去形で語るのには、いささかわけがある。大学ならびに大学院では、主に十七世紀のフランスの哲学者であるルネ・デカルトを研究してきた。一九九二年に高知大学に赴任することになり、主に「倫理学」を担当することになった。赴任した当時は、学生には倫理学を講じ、研究としてはデカルトに関する論文を書くというスタンスで数年を過ごした。ところが、一九九五年に阪神・淡路大震災が発生して、そのスタンスを大きく変えざるをえないことになる。というのも、多くの人が亡くなったというのに、わたしは無事に生きている。しか

も、悠長な哲学史の論文を書いてそれで済ましていた。その年の五月ごろ、わたしはデカルトの「高邁」に関する論文をものしたのであるが、しきりに何かが違うような気がした。儉安の夢を貪っていたのではないかという自問自答だった。そこで、もう少し現代の問題について「哲学」しようと思いついたのである。

現代の社会問題にはいろいろなものがある。差別問題、いじめの問題、高齢少子社会の問題、若者の就職難の問題、中高年層のリストラ問題、家庭内暴力や虐待などの問題、引きこもりやニートの問題、ホームレスの問題、原発の問題……教え挙げればきりが無いほ

どである。わたしは、それらの問題の一つ一つに専門的に取り組む立場ではない。哲学的に、それらに通底する要素を抉り出すことがわたしの課題である。そこで仮説として思い至ったのが「居場所」という概念だった。人間は、居場所さえ確保できれば、問題がなくなるわけではないとしても、かなり緩和されるのではないかと。そこで、十年以上に亘って居場所問題を考えてきたというわけである。拙著『人間の輪郭』(不二出版、二〇〇四年)〔翌年、第十五回高知出版学術賞、受賞〕では、その成果の一部が論じられており、今でも学生とともに研究しているテーマの一つである。

さらに、もう一つのテーマは、日本映画を材料にして、「戦後の日本人の倫理観の変遷」を探ることである。こちらの方は、わたしのブログである「日日は労働セレクト」で鑑賞した邦画の感想を綴ることによって、研究の布石を敷いてきた。展望としてはいまだにほんやりとしているが、一九六四年の東京オリンピックを境にして、その後で倫理観の変換が起こったというのがわたしの見通しである。一例を挙げれば、山田洋次監督の初期の頃の作品に『下町の太陽』(一九六三年)があるが、あの作品の中で倍賞千恵子が演じた町子という女性の台詞が光っている。恋人(早川保)の「黙って俺について来い」という言葉に対して、「黙って？」と、疑義を挟んでいるのである。彼の出世欲に憑かれた利己的な生き方に疑問をもったのである。少なくともこの台詞は、五十年代まで支配的だった「女の幸せは結婚にある」という通念を壊している。そのような通念は堅固なものだった。たとえば、『めし』という成瀬巳喜男

監督の作品(一九五一年)がある。この作品の中で、原節子が演じた人妻も結婚に疑問を抱くが、戦争未亡人(中北千枝子)の苦労を垣間見た瞬間、平凡だが安定した結婚生活の幸せを肯定する女に戻ってしまう。おそらく、六十年代に入ってから、男尊女卑を前提とする儒教的な世界が、戦後の男女同権を建前とする民主的な世界に取って代わり始めているのである。もちろん、過去と現在はいれ子の状態のまま、少しずつ未来を紡ぎ出しているのだから、この時期に劇的な変換を遂げたなどと主張するつもりはない。「徐々に変わっていった」と言っただろう。

『雲ながるる果てに』(一九五三年、家城巴代治監督)などがそれに当たる。ところが、六十年代に入ると、様相が一変して喜劇タッチの作品が登場する。たとえば、早くも六十年代直前の一九五九年には、『金語楼の三等兵』(曲谷守平監督)が公開されているし、『拝啓天皇陛下様』(一九六三年、野村芳太郎監督)や『兵隊やくざ』(シリーズ(一九六五年〜一九七二年、増村保造監督他)などが人氣を集めている。七十年代はどうだろうか。戦争を多角的に描く作品が目立つ。たとえば、『戦争と人間(三部作)』(一九七〇〜一九七三年、山本薩夫監督)や『不毛地帯』(一九七六年、同監督)などである。さて、この七十年代までは、戦争がさまざまなかたちでリアルに描かれていると言っただろう。ところが、八十年代に入ると、少し様相が変わる。たとえば、『瀬戸内少年野球団』(一九八四年、篠田正浩監督)という作品がある。その中で、郷ひろみが傷痍軍人の役を演じているが、ほとんど軍人には見えなかつ

た。これは郷ひろみがとくにそうであるというわけではなくて、これ以降、多くの俳優に感じたことである。日本の男優はヤクザと兵隊を演じさせれば様になるといふ説があるが、ヤクザはともあれ、兵隊に関して一言すれば、少なくとも八十年代以降はこの説が必ずしも当てはまらないと思う。九十年代にはほとんど取り上げるほどの作品はなく、二〇〇〇年代に入ると、明らかに史実が歪められた作品が登場する。たとえば、かなり評判になった『ローレライ』(二〇〇五年、樋口真嗣監督)にしても、おそらく『潜水艦イ・57降伏せず』(一九五九年、松林宗恵監督)の焼き直しであるが、ずいぶんと酷い筋書に変えられている。つまり、戦争は、映画の世界においても、風化しつつある。史実が恣意的に歪められることになれば、若い人に誤った観念を植え付けることにもなりかねないのである。例のカルト教団が起こした凶悪事件も、すでに二十年を経て色褪せてきた。あの当時、教養の大切さが盛んに説かれたはずであ

るが、それも忘れ去られようとしている。わたしは、そのような世相に、いささかなりとも波紋を起こしたいと思っているのだが、さでどうなるのか。(了)

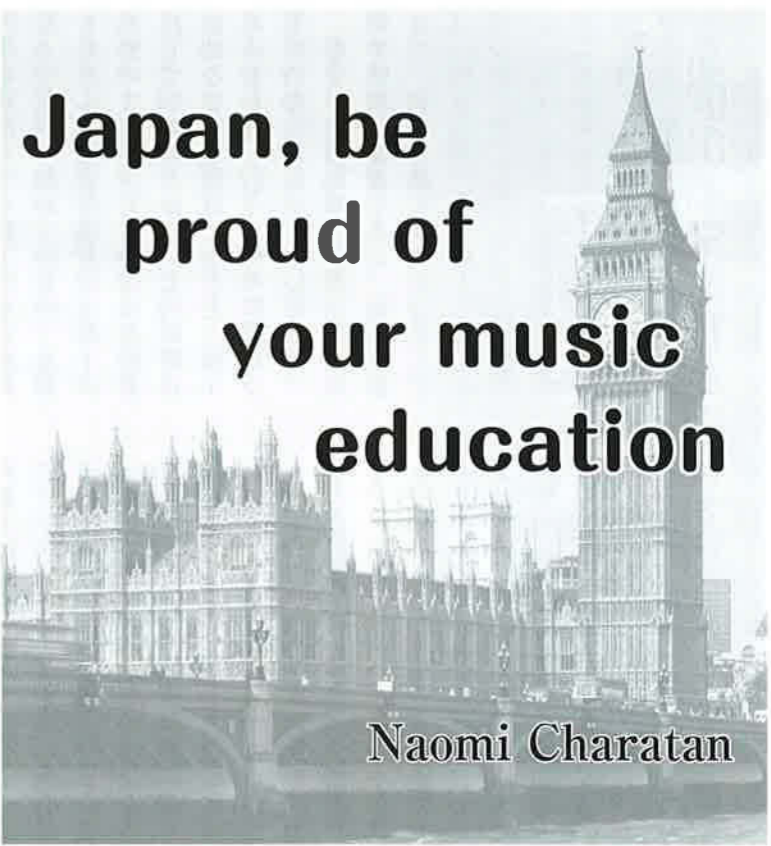


むとう せいじ

一九五四年 東京生まれ

もう一つ例を挙げよう。それは戦争映画の変遷である。敗戦直前まで、戦争を描く映画のほとんどは「戦意高揚」を目的としたものだった。『ハワイ・マレー沖海戦』(一九四二年、山本嘉次郎監督)や『加藤隼戦闘隊』(一九四四年、同監督)などがその典型的な作品である。戦後、それは反戦映画へと変貌する。たとえば、『真空地帯』(一九五二年、山本薩夫監督)や

たたとえば、『瀬戸内少年野球団』(一九八四年、篠田正浩監督)という作品がある。その中で、郷ひろみが傷痍軍人の役を演じているが、ほとんど軍人には見えなかつ



# Japan, be proud of your music education

Naomi Charatan

二〇一三年の八月、私は高知のALITとしての新しい生活を始めました。故郷のイングランドは曇り空が多くて、太陽の光があまり当たらないので、とにかく暑い高知の夏にびっくりしたことを覚えています。

大学で音楽を学び、その年に卒業したばかりだったので、高知に

で教え合うことが少ないからです。生徒が主体性を持って活動すること、より高い技術や良い関係性をつくることができ、先生に頼りすぎない、自立した学生になります。イングランドの多くの学生は、このような学生同士が教え合うということを大学まで経験することはないのです。



来たときはとても緊張してしま

た。日本文化について何も知らず、日本語を話すこともできず、しかも、高知が地図上のどこにあるのかもよくわからない状態でした。私はロンドンの近くのベッドフォードで暮らしていました。ロンドンでは世界でも有名な音楽の街で、いろんな音楽に出会えます。とこ

レベルで表現しているとは全く想像していませんでした。さらに、学生が学校の楽器で練習でき、活発な部活動があり、お金のかかるプライベートレッスンを受けなくても良いので、学校以外の音楽活動もどんな人でも楽しむことができていると思います。

イングランドでは、ある一定以上の演奏技術を持っていなければ、バンドやオーケストラに参加することは難しいでしょう。でも、日本ではしっかりと演奏できるように教えてくれるので、初心者がいなくてもレベルの高い音楽が聴けるこの環境が、音楽教育の質を落とさないのだと感じられます。

ろが高知は山と海に囲まれた土地なので、ロンドンと比べて、音楽の文化があまりないのではないかと不安になりました。でも、そんなことは全くありませんでした。確かに、高知は田舎だと言われていますが、市内でももっと田舎の村でも、世界中の人々と一緒になって音楽活動ができる、とても素敵な場所だったので

悩んでいると思います。イングランドと日本では、まず部活動の文化が違います。イングランドの学生は色んな部活動に所属するのが一般的で、練習も週に一、二回くらいです。なので、より上手になろうとすると、学外の専門の先生を見つけて、プライベートレッスンを受けるようになります。また、学校には楽器がほとんどなく、あってもポロポロで、みんな自分の楽器を買わなくてはいけません。

二〇一四年の十月、鏡野吹奏楽団に参加したとき、日本の音楽教育を担う素晴らしい音楽家と演奏しました。また、オレンジホールで行われた「日豪交流・第二回友好コンサート」では、いの混声合唱団とともにオーストラリアの聖歌隊と歌いました。この体験は、言語も文化も異なる人々をより深くつなぐのには音楽の力だと、以前にも増して感じさせるものでした。

将来はイングランドに帰り、音楽の先生になるつもりです。そして、高知のようにみんなで、学校以外でもできるだけたくさん音楽活動をしていきたいです。

追手前高校の学生は、人数は少ないけれど、とてもレベルが高く、一所懸命練習に専念していて、本当に感動しました。それから、日本語はわからなくても、できるだけ練習に参加しています。

また、驚かされたのは、練習中に先生が全く来ないことがあったのです！イングランドでは先生が来ない日は部活動自体がなくなります。日本のような先輩、後輩という文化がないので、生徒同士

いつもかイングランドが、ずっと前から日本が音楽教育で作り上げたものに気付けばいいのですが。音楽は富裕層だけのものではありません。みんなのためのものではないです。みなさんは日本の音楽教育を誇りに思ってください。

ナオミ・チャラタン  
一九九一年 ロンドン生まれ  
オックスフォード大学で音楽を学ぶ。二〇一三年より追手前高校のALITとなる。



(※翻訳 編集部)

褒姒の笑いのなぞ④

今回は、褒姒が初めて笑う場面を読み解きたい。褒姒は二度笑うが、その一度目である。

一個の品物のように、褒の王から周の幽王に献上された褒姒は、後宮へ入ってからも「笑わない女」であり続けた。幽王は褒姒の美貌のとりことなり、なんとかその笑顔を見たいと願う。褒姒は、幽王が生まれてはじめて出会った、所有しきれない支配しきれない、とどかない女だった。その笑顔を見たいがために、幽王は褒姒を正妃の位につけ、さらに皇太子宜臼を廃して褒姒の子伯服を皇太子とする。だが褒姒の顔に笑いは現れなかった。幽王はなんとしても褒姒の笑顔を見たいと切望する。

するうちに、正妃を廃された申后の父申候が異民族と手を結んで、反乱をくわだてているという不気味な噂が流れる。この危機に対応するため、幽王は王宮のある驪山の頂に城壁をめぐらし、敵襲を告げるための烽火台と鼓樓をつくった。

だが、幽王の四年、五年、六年と、何事もなく過ぎて行った。

幽王の七年のある夜、佞臣に示唆されて幽王は、敵襲がないにもかかわらず烽火台に火を入れた。そうすれば、褒姒が喜ぶのではないかと思っただのである。すると、たちまち中国全土に大混乱が生じた。「家臣たちは一人残らず王宮に馳せ参じ、武装した兵と馬とは、王宮の周辺に集まって渦を巻いたのである。」

以下は、それに続く場面である。

褒姒は王宮の一室から驪山の稜線に沿って一定の間隔を置いて火の燃えるのを見た。月の欠けた夜だったので、赤い火焰の舌が暗い夜空を嘗めるのが、異様な美しさで眺められた。王宮を取り巻く闇は軍馬の嘶きと移動する兵の騷擾で満たされた。王宮内も人の出入りが烈しかった。朝臣も武人も周章てふために馳せ参じ、烽火台に火が

揚がったのは敵襲のためでないと知ると、ただ茫然として山嶺の火に見入る許りであった。回廊にも庭にも、そうした人たちが群がっていた。

幽王は褒姒に山嶺の火を指し示して、美しいかどうかを訊ねた。すると、褒姒の顔に初めて笑みが見え、低い声であったが、褒姒がその口から漏れた。幽王は驚いて褒姒の顔に見入ったが、その時はもう褒姒の顔からは笑いは消えていた。併し、このことは幽王を狂気させた。幽王には微かな笑みを浮かべた妃の顔が、妖しく、美しく、この世ならぬものに見えた。「褒姒の笑い」・新潮文庫「樓蘭」所収

褒姒が笑った瞬間の描かれ方が印象的だ。言葉の細部にこだわりながら笑いのなぞを読み解きたい。

T「褒姒の顔に初めて笑みが見れ」とあるね。映画で言えば、褒姒の顔がアップになるところだ。頭の中のスクリーンを意識して下さい。褒姒の顔は正面、それとも横顔？ どちらの顔が浮かんでくる？」

P「……横顔」

T「なぜ横顔だと思ってる？」

P「……」（答えられない）

T「褒姒の顔を見ているのは誰？」

P「幽王」

T「そうだね。視点は幽王の側にいる。幽王は今、褒姒に山嶺の火を示しながら、「美しいかい？」とたずねている。つまり二人は山嶺の火を見上げている。」

P「そうか。褒姒は山嶺の火を見ていて、その横顔を幽王が見ている」

T「だから読者も、幽王といっしょに褒姒の横顔を見ることになる。じゃ、横顔のどこに笑みは現れたの？」

P「ほったた」

T「そう。頬だね。額では笑わない。映画で言うと、褒姒の横顔がアップになって、次の瞬間スローモーショで映像が変わる。…深い湖を思わせる褒姒の頬の底から、ひとすじの水泡のように笑みがのぼってきて、ゆっくり花開いて、かすかな波紋を残して消えてゆく。…そんな感じだ。カメラワークが鮮やかだ。さっきまでは、中国全土の混乱を映していたカメラが、都錦京へ、錦京から王宮へ、そして王宮の一室へとしほりこまれていって、最後に褒姒の横顔の一点で静止する。」

ところで、この褒姒の笑いだけ、どんな笑いだったんだろう？」

ここで授業に遊びを入れる。生徒達から様々な笑いの擬声語を出してもらい板書してゆく。「ハハハ」

「ホホホ」「ヒヒヒ」など。ふざけて「オホホホ」「カンラカンラ」「ドヒヤヒヤ」などと言いつつ生徒も出る。中学生はこういう遊びが大好きだ。重いテーマへ迫る前のウォーミングアップとして、こういう時間も大切にしている。けれど最終的には、次の意見が多くの支持を得る。

P「フフフ……」

T「どうして『フフフ』なの？『ホホホ』じゃなくて」

P「低い声であったが笑声がその口から漏れた。」と書いてある。「ホホホ」は高い声だし」

T「なるほど。だけど、これも書いてあるよ。『幽王が見たときにはもう笑いは消えていた。』つまり、笑みが浮かんだ。おつ、と思つてさらに『見入った。』だけでもう笑みは消えていた。つまりそばで顔を見ていた幽王にも、はつきりとはとらえられないくらいかすかで、あつという間に消えてしまう笑みだったんだ。すると、これは『フフフ』よりもっと短いね。どんな笑いだろう？」

P「フ……」

T「そのとおり。これは、『フ……』だと先生も思う。不気味な笑いだ。さて、一体褒姒はどうしてこの不気味な笑いを笑ったの？ この笑みの正体は何だろう？」

先生の解釈を紹介したい。

先生は、あるとき気がついた。烽火台に火が上がった日、王宮へ駆けつけて、これは戦じゃない、幽王と褒姒のためのたんなる花火大会だ、と知らされた武人たちは、その瞬間どういう存在になったのか？

一体どういう存在になったと思う。彼等は『呼ばれもしないのにかつてにやってきた馬鹿な奴』になつてしまったんだ。…こういう存在を何と言う？」

P「……およびでない存在」

T「そう。前の授業で出た言葉だね。もつと別の言い方もできる。何とかの客……」

P「招かれざる客」

T「そうなんだ。彼等は驚いたり、あきれたり、怒ったり、絶望したりしたはずだが、一番深刻に感じたのは、俺たちは『およびでない存在』だという、なんともいいようのない情けない気持ちだったはずだ。

一体俺たちは何のためにここにいるんだ。俺たちって一体何なんだ。この不安。つまり、いるべきでないところにきてしまったという不安。これは、昔誰かが味わった不安だ。誰だろう？」

P「褒姒」

P「子どもだったころの褒姒」

T「そうだね。さらにつつこんでみたい。武將たちをこの王宮へと導い

たのは、彼らの国に対する何ですか。国を救おう、幽王を救おうという……」

P「愛国心」

P「忠誠心」

T「こんな気持ちは何から生まれる。自分の運命と国家の運命は同じだという、自分と国家は一つだという……国家との？」

P「一体感」

T「そうだ。さて、一体感を裏切られ、自分の存在価値を奪われる。そういうみじめな気持ちを何といひますか？」

P「疎外感」

T「さあ、そうすると見えてくる。なぜ褒姒が笑ったかが。…なぜ褒姒は笑ったんですか？」

P「武人たちの情けなさ、自分が子どもだったときに味わったのと同じ情けなさだったから」

T「褒姒は家庭のなかで、『拾い子だ、拾い子だ』と言われて育ってきた。『およびでない存在』であり、『招かれざる客』だった。褒姒は（超自然的存在としての褒姒は別として）そのつらさ、悲しさ、情けなさ、そしてなによりも、深刻な不安によつて感情を麻痺させられた。その褒姒が、かつての自分と同じ立場に立たされた家臣たちを見て笑った。つまり、家庭という小宇宙で起こった悲劇が国家という大宇宙のなかに再現

している。褒姒の家庭の悲劇の向こうに、国家滅亡の悲劇がわき起こり、国家滅亡の悲劇のなかに褒姒の家庭の悲劇が反響している。そういう悲劇の二重奏。『易姓革命』がこういう皮肉な形で成就されてゆく。そこにこの物語のテーマがあると読めないだろうか」

翌年幽王は、褒姒の笑顔を見たいがために、再び烽火台に火を入れる。「王宮はまた、血相を変えてやつて来て、あとは喪心したように痴呆の表情をする奇妙な訪問者たちで膨れ上がった。」と記されている。

「喪心」したように「痴呆の表情」をする「奇妙な訪問者たち」。…彼等のイメージを裏返すと、家庭内の「招かれざる客」だった褒姒の、能面のように無表情な顔が浮かび出るような気がする。だとすれば「フ……」は、褒姒の無意識的な復讐の笑いだったことになる。

ひろい まもる

一九五四年 高知市生まれ  
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

# あらしの後

清里 達也

「お前は臆病者だ」

冷えたビールと鯉のたたき。演出家の内藤氏のお言葉。ある日の稽古終わりの居酒屋でのワンシーンである。

高知の演劇推進プログラムで上演した作品「あらし」の登場人物たちは、

社会の荒波の中で自分という船の舵を動かす事に辟易としていた。生き続ける限り永遠に止むことのない評価とい

う風雨の中で、誰もが皆もがいていた。かくいう出演者も、現実社会におい

てはまさしくその船の操舵士なのである。そして皆この公演から何かを学ば

うと常に全力で立ち向かっていった。一カ月という期間で、それぞれの役に命

を吹き込ませる為に試行錯誤を繰り返した。純粹に、心の底から面白いと思

える作品を作り上げていくその表情に曇りはなかった。何よりそこから生ま

れるエネルギーはとても刺激的で、心踊らされるものだった。

ただ、いつの間にか僕はただ皆の背中を見ていたことに気づいた。どこか居心地の良さに甘えて、ただそこに存在できる満足感の中で漂っていたのだ

と思う。

「清里、何やってるんだ」

耳に響く皆の叱咤は厳しく、そして温かい。しかし、どうにも前に進めない。足を動かす方法を模索する。そうして一歩一歩を踏み切るが、どれもあさつての方向を向いている。そのたびに皆は手を差し伸べてくれたが、僕はその手を握り返すことができなかった。自分ひとりの力とプライドを過信していた。

「体験と現象」。演出にあたって、

内藤氏は終始この二つを掲げた。目の前で起こっている出来事に対して体は忠実に反応する。それに伴って、人が台詞という形で表現する。舞台上で起こっているさまざまな虚構は、それを満たして初めてリアルなのだ。役を生きる。本番の舞台に編集などない。だから、自分の頭で決め付け、凝り固めて見せる演技で成り立たせた芝居は、面白くないのだ。

僕は知らぬ間にそのタブーを犯していた。芝居は人が密に絡み合って初めて成り立たせていくものだ。その過程は貴重な経験となり、人生の糧となる。そうして芝居に鮮やかな表情を見せていく。しかし、僕はその変化に恐れを抱いていた。いや、現に今でも恐れているかもしれない。新しく生まれる評価で、今まで築き上げ、自分を支えて

いた何かがなくなり、そこに入り込む変容を受け入れることができなかった。世間体、人に良く見られたいと思う気持ちが強いが為、少しの「あらし」で吹き飛ばすような、ウソという間に合わせのチンケなはりばてで、ただその場の「風雨」をしのぐ事で、生きていくという刷り込みをしていただけに過ぎなかったのだろう。こうすれば面白いはず、この台詞はこう出そうという僕らの紆余曲折は、すべて自分ひとりの世界の中で練り広げられた、単なる虚構だった。

稽古場で感じたエネルギーの源は、役を生きようと真摯にもがき続ける役者同士が絡み合って生み出したものだ。そして、それを作品の人物に通すことで役にリアルが生まれる。決して、ひとりで粘土細工のように作り出すものではない。現実社会においても同様だ。人が生きていく中で織りなす輪には、山も谷も、ましてや行き止まることすらもある。だからこそ、生きるという事は魅力的なのだ。未だに社会を恐れている自分は確かに存在する。ただ、その輪の中へ飛び込んで、共に進んでくれる人たちと心から笑ってみたい自分もいる。だから、これから僕は社会という海から逃げることもなく、もがいていかなくはならないと思う。そうして、本当の自分を出して、まっすぐ

に人に手を差し伸べられるような人間でいたいと感じている。

内藤氏は冒頭の言葉の後、続けてこう仰った。

「だからお前はまじめに演劇をやれ」あのエネルギーの出所を知った今、どうにも僕は一生演劇をやめられそうにない。



左から二人目が筆者

きよとつと たつや

一九八七年 いの町生まれ  
TRYANGLE所属。二〇一四年十月に実施した、「高知の演劇推進プログラム『あらし』(内藤裕敬作・演出)」において、オーディションを通過し、舞台に立った。

## 高知市文化振興事業団 11月の事業から

### JAZZ NIGHT

## 木住野佳子コンサート

二〇一四年十一月十三日(木) 高知市文化プラザかるぽーと小ホールにて、実力派女性ジャズピアニスト、木住野佳子さん率いるピアノトリオの高知公演を開催しました。

フロント・アクトは、高知市を拠点として活動するデュオユニット「マキコリカコ」さん。マキコさんのピアノの調べに乗せた、リカコさんの優しく力強い歌声と、二人の軽妙なMCに



よって、会場は温かい空気感に包まれました。

メイン・アクトの木住野佳子さんは、真紅のドレスを身に纏い、「HOPE」という疾走感溢れるオリジナル曲で公演をスタートさせました。ドラムの藤井学さん、ベースの日景修さんのテクニクも素晴らしく、ステージ上の三人は、まるで楽器を体の一部として、踊るように演奏しているのがとても印象的でした。

木住野さんは七年ぶりの来高で、かつてピアノソロで演奏した『よさこい節』をトリオで披露するなど、この空間でしか味わえないアレンジを施した、数々のカヴァー曲も織り交ぜていました。

ラストは庄巻の「リベルタンゴ」、アンコールは「上を向いて歩こう」で締め括り、ジャズの持つ自由な楽しさ、奥深さを感じられる贅沢な公演となりました。  
(入場者数・六十名)

## スイセイ・ミュージカル「クリスマス・キャロル」

クリスマスをテーマにした物語としてもっともポピュラーなもののひとつ、「クリスマス・キャロル」。クリスマスより一足早い二〇一四年十一月二十一日(金)に高知市文化プラザかるぽーと大ホールで、劇団スイセイ・ミュージカルによる「クリスマス・キャロル」を上演しました。

出演者のひとり、川島なお美さんは高知県観光大使を務めるなど高知との縁も深く、遠方からも熱心なファンの方が駆けつけたり、ロビーには豪華なお花が並んだり、華やかなミュージカルへの期待が高まっています。

コミカルな笑いがちりばめられた楽しい舞台の一方、ストーリーが進むにつれて観客は草刈正雄さん扮する主人公・スクルージへの共感が生まれ、深まっていくようでした。そしてクライマックスの少年タイムとの感動的なシーン！客席全体が温かい気持ちになれた一夜になりました。

この舞台を共有したみなさんにも、きっとスクルージと同じように最高のクリスマスが訪れたことでしょう。  
(入場者数・三百九十六名)





### キラリふじみ・レパトリー 「Mother-river Homing」

埼玉県富士見市にて先進的な取り組みを続ける公共ホール・キラリふじみのレパトリー作品として、同劇場のアソシエイト・アーティストの田上豊氏が実在の家族をモデルに、独自の手法で繰り広げる「記憶再生演劇」。

- 日時 2月4日(水) 18:40開場 19:00開演
- 会場 高知市文化プラザかるぼーと小ホール
- 料金 一般 前売り 2,500円(当日 2,800円)  
高校生以下 前売り 1,500円(当日 1,800円)
- お問い合わせ 高知市文化振興事業団 088-883-5071

## 風俗

### 有為を超えて無為へ

のだからか。むしろ目に見えて成果を求めないからこそ、学問や遊びが成り立つものではないのか。そのもつとも肝心な部分を取り違えてるんじゃないのと思える意見が、堂々と新聞の紙面を飾っていたり、テレビなどでしたり顔に語られているのを耳にすると、おまえは政治家か商売人の回し者か!と私はつい取り違えて

最近、学問の分野でさえ何かの役に立たないといけなような論調が目目に出る。あたかもそれが経済活動であるかのように錯覚して、成果を期待するのだ。同工異曲というのだろうか、まったく違うことのように妙に似ていることだが、そもそも遊びだとか学問は、何かの成果や結果を求めるためにするもの

しまつ。哲学者である鷗田清一氏の「老いの空白」という本のなかにこんな意味の話がある。ローマのあるカフェの店主は仕事を店員に任せたり、壁にもたれてぼんやり外を眺めていたり、ぶらぶら歩いたり、手持ちぶさたを粉らわすよとすると、他人の迷惑などどこ吹く風とただただたずんでいるのだ。という話なのだが、氏は「この高貴ささえ漂わせる(見事なまでの無為)の境地が、私たちの老いには必要では」といっている。が、その「無為」は「老い」だけでなく、いまの日本の学問や遊びを旨とすべき子供の人生、マスコミで売れる顔でモノをいう人種にこそ求められることなのではないか。すごく生意気なことをいってしまうが、最近常に危機に晒されている学問の府である大学は、有為ではなく、それを超絶した「無為」の世界にあるべきなのではないか。(稜)



### 大駱駝艦・田村一行 舞踏公演 「薔薇とお接待」

世界で活躍している舞踏カンパニー「大駱駝艦(だいらくだかん)」の舞踏手、田村一行が来高。新たな舞踏の可能性として注目されている彼の世界観は、私たちに新たな「気づき」をもたらしてくれるはずだ。今回は公演だけでなく、ワークショップも開催。非日常のちょっぴり不思議な世界観を体感してみよう!

- 日時 1月25日(日)13:30開場 14:00開演
- 会場 高知市文化プラザかるぼーと小ホール
- 料金 一般 2,000円 学生 1,000円
- お問い合わせ 高知市文化振興事業団 088-883-5071

## 今号の表紙

### 「初日の出」

桑江 弘将

文化高知の1月号ということでまず最初に浮かんだのが「初日の出」でした。去年、初日の出を見に行ったのですが、とても印象的だったので、その時の写真を少し加工して作品にしました。

(くわえ ひろまさ/  
国際デザイン・ビューティカレッジ1年生)

## キャリア女性の 飲み話



### 風俗歳時記

「飲むことは、文化」とばかりに、飲み会を時折開催する私。飲み仲間はいない同じ世代の子どものいるお母さんお父さんたち。フランスやイタリアのワイン、最近は連ドラの影響でウイスキーも持ち寄り、ちょっとオシャレな料理を用意して日付が変わるまで飲んだりもする。ある日の飲み会で……

だが、「キャリアを捨てるのは、やっぱり女のの？」  
アベノミクスの効果もあるのだろうか女性の管理職登用や女性の社会進出が何となく進みつつあるような錯覚に陥る。男女雇用機会均等法初期世代の私自身は委員や講師として高知市の男女共同参画の推進に力を注いできた。法や条例の制定、プランの策定、社内規定の改善……いろいろアウトラインの整備が進み、行政はある意味満足感を得ているのかも知れない。しかし、本当に女性が仕事と家庭を両立させるには、転勤族の妻は? 遠距離のカップルは? キャリアを捨ててついて行かざるを得ない日本の慣例や社会

の仕組みを、もつと親世代や本人や会社にも考えてもらわないといけないのではない。  
「彼氏できた! 商社マン。3年したら海外赴任だよ」と大学生のお嬢さんに報告を受けたというお母さんが複雑な思いを口にした。商社マンなら洋酒を安く分けてもらえるかなあ……いやいや、そうではなくて……それで結婚するの? 就職は? 海外へついて行くの?」参加者は、アルコールのピッチを上げながら、矢継ぎ早に質問した。我が娘の将来に想像を巡りに巡らせてリスキマネジメントしているお母さんは、私だけではなかった。(立花香)



## 高知を撮る

第30回写真コンテスト入賞作品

### 収穫の日

(平成5年12月 南国市)

松木 宣博

④南国市上野田では、つゆの用の大根が栽培され12月になると収穫し、干してました。今ではほとんど見られません。  
⑤南国市上野田にて。大根を引き抜く人、洗う人、干す人と役割があり、多くの皆さんでの作業でした。  
⑥作業は一段落。お茶とお菓子で談笑。



第25回

# 高知出版学術賞

推薦募集

優れた学術研究の振興は、

文化や出版の向上のみならず、広く高知県の発展に貢献します。

「高知出版学術賞」は、当該年における

最も優れた学術出版を顕彰することによって、

学術研究の振興を図ることを目的としています。

該当図書について、皆様のご推薦をお待ちします。

**【対象】**

次の事項をみたすもの。

- 1) 高知県内に在住する者の学術的著述、または、県外在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。
- 2) 2014年(平成26年)1月1日から12月31日まで(奥付の日付による)に発行された単行本。

**【推薦】**

自薦・他薦を問いません。  
必要事項を所定の推薦書に記入し、該当図書3部を添えて審査委員会へ提出して下さい。  
(図書は、申し出により審査後に2部まで返却します。)  
受付締切 1月31日(土)

**【表彰】**

出版学術賞3点以内に賞状と賞金10万円、特別賞(今年度より新設)1点以内に賞状と賞金5万円を贈ります。  
要綱・推薦書をご希望の方にはお送りします。また推薦書は、当事業団のホームページからダウンロードできますのでご利用ください。

**【推薦・お問い合わせ】**

高知市文化振興事業団 内  
高知出版学術賞審査委員会 〒780-8529 高知市九反田 2-1  
電話 088-883-5071 e-mail kikaku@kfca.jp



第30回 「記録写真部門」 平成の部  
準特選  
はりまや橋交差点 瀧洞修一

第31回

# 写真コンテスト

# 高知を撮る

作品募集

どなたでも、一人何点でも応募できます。出品料無料

応募締切

**1月31日(土)**

発表 3月上旬

過去から現在に至る高知県内の出来事や風景、人々の暮らしを記録し、郷土の様々な表情を伝えるとともに、未来の高知のあるべき姿を考えていこうというものです。優れた作品は、入選作品展にてたくさんの方にご覧いただけます。

## テーマ

**●記録写真部門**

記録性を持った高知県に関する写真

- ①平成の部(平成時代に撮影されたもの)
- ②昭和以前の部(昭和以前に撮影されたもの)

**●I LOVE 高知部門**

好きな高知の風景・風俗等を表現した写真(平成26年1月1日以降に撮影)

**応募先**

高知市文化振興事業団 写真コンテスト係  
(月曜休館。祝日・振替休日は開館)  
〒780-8529 高知市九反田 2-1  
電話 088-883-5071  
作品受付は8:30~20:00

**賞**

特選 2点(賞状・賞金3万円)  
準特選 10点以内(賞状・賞金1万円)  
(各部門とも)

**入選作品展**

平成27年3月17日(火)~22日(日)  
高知市文化プラザ 市民ギャラリー 第4展示室

- カラー・モノクロともにワイド四ツ切サイズ(254mm×365mm)以上
  - 組写真は3枚までで、写真的順番と組写真であることを明記して下さい。
  - 両部門ともパネル貼りは不要です。
- 詳しい応募要領は高知市文化振興事業団までお問い合わせ下さい。



第30回 「I LOVE 高知部門」  
準特選  
名野川饅門神楽 大西隆俊